

論 説

## 福山城伏見櫓に関する考察

佐藤 大規 (地域資源マネジメント学科)

### A Study of the Fushimi Tower at Fukuyama Castle

Taiki SATO (Regional Resource Management)

キーワード：城郭、近世、建造物、移築、伏見城

Keywords: Castles, Early Modern Period, Buildings, Relocation, Fushimi Castle

【原稿受付：2023年7月25日 受理・採録決定：2023年8月4日】

#### 要旨

福山城は、水野勝成によって築かれた近世城郭である。現在、福山城には伏見櫓と筋鉄御門が現存し、重要文化財に指定されている。また伏見櫓は、伏見城から移築されたことでも著名である。筆者は平成29年(2017)に伏見櫓の現地調査(実測図作成、部材の新旧判定、痕跡調査、写真撮影)を行う機会を得た。本稿ではその調査結果をもとに、伏見櫓の建築年代を再検討する。さらに平面や外観などについて現存する三重櫓や天守と比較することで、伏見櫓の特色を明らかにすることを目的とした。その結果、伏見櫓には転用材が多数使われていること、それによって生じた不都合を繕うために現場合わせが見られること、架構や平面の構成に古式な点が見られることなどといった特色を明らかにできた。また、建築年代を明確にはできなかったが、上記のような特色から、秀吉が築いた木幡山伏見城の松ノ丸東櫓からの移築である可能性を指摘した。

#### 1. はじめに

福山城は、水野勝成によって築かれた近世城郭である。中心となる天守は五重五階半地下一階の層塔型で、付櫓を伴った複合式天守である。伏見櫓をはじめとする三重櫓が7基、二重櫓が16基も林立する大規模な城郭であった。また本丸御殿や伏見櫓・鉄門など複数の建物が伏見城から移築されたことでも著名である。明治維新後に廃城となるが、天守や伏見櫓など数棟が残っていた。しかし昭和20年(1945)8月8日の福山空襲によって多くが焼失し、伏見櫓・筋鉄御門が残るのみとなった。その後、昭和41年(1966)に天守・月見櫓が復興、御湯殿が復元された。続いて昭和48年(1973)に鏡櫓が復興、昭和54年(1979)に鐘櫓が修復され、おおよそ現在見られる福山城が整えられた。なお、平成30年(2018)に天守が広島県内では初めて景観重要建造物に指定された。また築城400年に合わせて天守の整備が行われた。

伏見城からの移築と伝わる伏見櫓は、昭和26年

(1951)から29年(1954)にかけて修理工事が行われている。その際、二階の梁に伏見城からの移築を示す刻銘が発見され、改めて伏見城からの移築が証された。しかし、修理工事については報告書が作成されていないため、軸部(柱など)を残した半解体修理であったことが伝わるのみで、部材の取り替えなどといった工事の詳細は不明である。筆者は平成29年(2017)に伏見櫓の現地調査(実測図作成、部材の新旧判定、痕跡調査、写真撮影)を行う機会を得た。本稿ではその調査結果をもとに、伏見櫓の建築年代を再検討する。また、平面や外観などについて現存する三重櫓や天守と比較することで、伏見櫓の特色を明らかにすることを目的とする。

#### 2. 伏見櫓の概要

##### (1) 平面

一階(図1)(図4)は東西8間(51尺8寸)に南北5間(27尺9寸)で、東西方向に長い縦長平面で

ある。柱間寸法はおおむね6尺5寸であるが、南北方向の南側2間は4尺2寸と狭くなっている。また「列3」が構造上の一階平面の中心通りであるが、北側が2間(12尺9寸)、南側が3間(15尺)となり左右非対称となっているだけでなく、南側のほうが約2尺長く、さらに中心通り(列3)は一階平面の南北方向の寸法上の中心とは北側に約1尺ずれている。内部は板敷で、桁行(東西)の中央に2つ(に3・と3)、その北側に2つ(に2・と2)、南側に6つ(ろ〜と4)の入側柱が立つ。身舎と入側(武者走)の区別は、整然としておらず明確ではない。なお、入側柱のうち中央通りの2つ(に3・と3)と南側西端(ろ4)および北側の西から2つ目の側柱(ろ1)は、一辺が9寸5分を超える太さである。側柱がおおむね6寸5分であるのと比べて1.5倍ほど太い。その中でも「と3」は1尺2寸四方と特別に太い。窓は半間の格子窓を柱に寄せ、内側に土戸を引く。南側に8ヶ所、東側に2ヶ所、西側に3ヶ所あり、北側に窓はない。狭間は、東側に正方形が2ヶ所、縦に長い長方形が1ヶ所の計3ヶ所あり、いずれも腰の高さほどに位置する。入口は北側中央の東寄りにあり1間幅の土戸を引き、その前面に石階段を付す。

二階(図2)(図4)は東西8間に南北5間で、一階と同大である。内部は板敷で、一階と同様に身舎と入側の区別は明確ではない。柱は一階からの通柱であるが、「わ又3」のみ一階からの通柱とならず、かつ位置をやや南側、すなわち寸法上の中心にずらして立つ。なお、この柱だけが三階への通柱となり、かつ9寸4分と太い。窓は半間と1間の格子窓があり、内側に土戸を引く。半間幅の格子窓は柱に寄せて設け、南側に8ヶ所、東西側に3ヶ所ずつ、北側に2ヶ所ある。1間幅の格子窓は、東西の2間目の柱間にそれぞれ1ヶ所ずつ設ける。なお、二階に狭間は設けられていない。

三階(図3)(図4)は、東西4間に南北4間である。ただし東西と南北では柱間寸法に違いがあり、実寸で表すと東西25尺8寸に南北23尺と東西方向が2尺8寸ほど長い。柱はおおむね5寸8分ほどであるが、東西の中央(む3・つ3)は8寸(む3)・8寸7分(つ3)と太い。内部は板敷で、南西隅の階段前方のみ一段下がる。中央西側には二階からの通柱(ね3)が立つ。また東西壁面に筋違を入れる。窓は板戸を内側に引いた半間の格子窓で、四面とも両脇に2ヶ所ずつ計8ヶ所設ける。狭間は、南側に縦に長い長方形を2ヶ所設ける。

## (2) 外観(図5)(図6)(図7)(図8)

屋根は一重目を腰屋根、二重目を棟の向きが東西方向の入母屋造屋根、三重目は棟の向きを南北方向にし

た入母屋造屋根とする。基部(二重目)に入母屋造の屋根を持つ望楼型の三重櫓である。各重とも本瓦葺とし、三重目の大棟両端には鯨を載せる。屋根勾配は、5寸7分(一重目)・5寸(二重目)・5寸4分(三重目)である。二重目の南北には、本瓦葺で破風の間を伴わない飾りの千鳥破風を付す。二・三重の入母屋破風および千鳥破風は、いずれも妻飾を白漆喰の塗籠として、蕪懸魚を設ける。外壁は各階とも白漆喰の塗籠とし、一・二階は柱形および長押形を造出した真壁造、一階北側(城内側)は柱を白木のまま見せる真壁造とする。三階は柱および長押をすべて塗籠めた大壁造とする。一階は柱ごとに白漆喰塗の方杖と腕木を出し、出桁を支える。二・三階は柱ごとに白漆喰塗の方杖を出し、出桁を支える。

## 3. 伏見櫓の建築年代

### (1) 先行研究について

伏見櫓は、築城に際して伏見城より移築された建物のひとつとされる。江戸時代に編纂された『備陽六郡志』によれば、「三階櫓 伏見より御拝領、筋鐵門の前に有 城付武具入」とある。解体修理において二階の梁に「松ノ丸ノ東やくら」と記された刻銘が発見され、伏見城からの移築が立証された<sup>(1)</sup>。

ところで、その移築元となった伏見城は、文禄元年(1592)に豊臣秀吉が指月に築城したのを初めにその後二度再建されている。すなわち、初代の指月伏見城が文禄5年(1596)に地震で倒壊したため、秀吉によって場所を変えて慶長2年(1597)に築かれた木幡山伏見城、さらに木幡山伏見城が関ヶ原の戦いの前哨戦で焼失したため、慶長7年(1602)頃に徳川家康によって再建された徳川伏見城である。したがって、福山城に移築された松ノ丸東櫓がどの段階の伏見城で築造されたものかによって建築年代は異なる。根拠は示されていないが、濱本(1936)や古川(1936)では、木幡山伏見城時のものとされていた。その後、城戸(1942)は、『舜旧記』などに「松ノ丸」が焼失したと記されていること、架構などに慶長初期の特徴が表れていることから、徳川伏見城で再建された櫓を移築したとしている。現在では、この見解が定説となっている。しかし、木幡山伏見城は慶長2年の築城であり、まさに城戸氏のいう慶長初期として差し支えない。詳しくは後述するが、伏見櫓の架構などには、木幡山伏見城からの移築としてもよい古式な特徴があると考えられる。ここでは先行研究を踏まえた上で、今回の調査結果で明らかになった伏見櫓の「部材の新旧」・「架構」・「平面形式」をもとに、その建築年代、すなわち移築元の伏見城がどの段階なのかについて再検討しておきたい。

## (2) 部材の新旧

まず各部材の新旧判定の結果を示しておく。部材にほぞ穴などの痕跡があり、それが元の状態に復元することのできない独立したものである場合、その痕跡は伏見櫓およびその移築元である伏見城松ノ丸東櫓とは関係がないと判断され、その部材は転用材と考えられた<sup>(2)</sup>。その他は、経年変化の度合いによって当初材・昭和取替材と判断した<sup>(3)</sup>。

その結果、柱は三階の隅柱2つ(む1・5)が昭和取替材である以外は、すべて当初材、あるいは転用材と考えられる。「に1・ほ4」には江戸時代、「へ・と1」および「り5」は昭和修理時と推測される根継があった。また前述したように「に3・と3・ろ4・ろ1」は、太さが9尺5寸以上であり、天守に使用される規模の柱が使われている。これらの柱はすべて転用材であり、天守かそれに比する規模の櫓からの転用と推測される。

架構材は一階の牛梁や長さ2間以上の梁が当初材もしくは転用材であり、短めの1間梁と一部の2間梁が昭和取替材と考えられる。二・三階の梁(牛梁を含む)はすべて当初材、もしくは転用材と推測される。小屋組は二重の棟木が転用材、束が当初材と転用材、貫が当初材と一部昭和取替材、三重は棟木および束は転用材、貫が当初材と一部昭和取替材と考えられる。その他各階の窓(敷居・鴨居・土戸・板戸・水管)および三階の格子は、すべて昭和取替材である。なお一・二階の格子は塗籠のため確認不能である。各階の階段手すり、二・三階の階段柵、一・二階の根太、狭間も昭和取替材である。

以上のように伏見櫓では昭和修理に際して窓や根太などは取り替えられていたが、柱や梁といった主要な構造材は、ほとんどが当初材もしくは転用材であり、建築当初の状態を保っていると考えられる。なお、明らかに転用材と考えられる材が多用されていることは、注目される<sup>(4)</sup>。

ところで、二階床板を支える根太は、すべて昭和取替材と推定されるが、それを受ける転用材と考えられる梁との間に隙間が見られた。したがって、そのままでは根太が宙に浮くため、根太を継ぐ箇所の一部の成を高くすることで、その隙間を埋めている。一方で昭和取替材と推定される梁上は根太との間に隙間がなく、普通に納まっている。これは元から納まっていたのか、昭和修理時に隙間が生じないように梁の成を調整したのかは判然としない。しかし転用材の梁と根太の隙間は移築時というよりは建築当初、すなわち松ノ丸東櫓時に生じたと考えほうが自然である。このような誤差は、きちんとした設計がされ、それに合わせた部材を用意していれば本来は生じないものである。以上に示した誤差は、この建物(伏見城松ノ丸東櫓)の

ために用意されたものではない部材、すなわち転用材を使用したために生じた不都合をよく表していると考えられる。また、そのような不都合を繕うため、現場合わせが行われた可能性も示していると考えられる。

## (3) 架構(図9)(図10)

次に架構に着目してみると、城戸(1942)が指摘しているように、現存する櫓と比べると整然としていない部分が多く見られる。ここでは紙幅の都合上すべてを記すことはしないが、特に注目されるのは、一階の牛梁が中心通りではなく、北に半間ほどずれた位置に架かっている点である。一般的に牛梁は、姫路城天守のように中心通りに架ける事例が少なくない。このように牛梁をずらして架けた理由としては、中心通りの太い柱(と3)を二階への通柱としたためと推測される。また二階の「わ又3」は、三階への通柱として「と3」と「わ又3」は、1尺2寸四方(と3)・9寸4分(わ又3)と太く、位置をずらしているが「と3」は一・二階、「わ又3」は二・三階とそれぞれ二階ずつを固める心柱のような役割があったとも考えられる。なお、「わ又3」が一階からの通柱となっていないのは、二階で本来の中心通りである位置に立てるためと考えられる。そうすることで、三階を一・二階の中心に置き、「わ又3」も三階の牛梁を支えることが可能となる。なお、城戸(1942)は架構が整っていない点を指摘して、伏見櫓を慶長初期の古式なものとしているが、それは慶長7年頃の徳川伏見城再建時ではなく、慶長2年頃の木幡山伏見城再建時としても5年しか変わらず、問題ない差であろう。

## (4) 平面形式

天守や櫓といった城郭建築では、少なくとも一階は、室内に柱(入側柱)を立て、その内側を身舎、外側の四周を入側として区画することが一般的である。これは、広島城や岡山城天守といった、初期の天守でも見られる特徴で、現存する三重櫓でも普通に見られる。伏見櫓ではこの区画が不明確であって、一・二階とも室内に入側柱は立てられているが、他の天守や櫓のように身舎と入側とを明確に区画できるほど整然とはしていない。現存する天守・櫓で身舎と入側の区別が全くない事例としては、弘前城二の丸辰巳櫓・未申櫓・丑寅櫓がある。弘前城の櫓の一階は4間四方と比較的小規模であり、あえて身舎と入側の区別をするほどではなかったと考えられる。天守の事例であるが、広島城や岡山城天守では上階になり部屋の規模が小さくなると入側がなくなっている。三重の丸亀城天守の一階平面は6間に5間と伏見櫓より小規模であるが、身舎と入側に整然と区画されている。伏見櫓のような比較的大規模な櫓で身舎と入側の区別がないのは、特異な事例と考えられる。建築年代を問わず多くの天守や櫓

の一階に身舎と入側の区画があったという事実からすれば、伏見櫓はそのような形式が整う以前の古式な状態を残しているとも考えられる。

#### (5) 小結

伏見櫓は、柱や梁などに転用材が多数使われていた。これらの転用材は伏見櫓が移築された建造物という前提に立てば、その移築元である伏見城松ノ丸東櫓の築造時に用いられた材と考えるのが自然である。したがって、次のことが指摘できよう。まず移築元である伏見城松ノ丸東櫓は転用材を多数使用し、例えば根太と梁の間の隙間のような不都合が生じそれを繕う、言わば現場合わせが行われても急いで造る必要があった。また、転用できる部材が近辺に多数あった。例えば文禄5年(1596)に指月伏見城は地震で倒壊するが、わずか1年という短期間で木幡山伏見城が再建されている。その際に地震で倒壊した指月の部材を使用したとすれば、転用材が多数用いられていることも納得できよう。

また架構や平面の形式には、他の天守や櫓に事例がないような古式な点が認められた。転用材を多数使用していることを考え合わせると、伏見櫓は秀吉が築いた木幡山伏見城の櫓(松ノ丸東櫓)としても問題はないと考えられる。城戸(1942)で指摘されているように伏見城の松ノ丸が焼失したとする記述は複数ある。ただし、伏見櫓の前身建物である東櫓そのものが焼失したことを直接記す史料はなく、焼失を免れた可能性も完全には否定できないと考えられる。

## 4. 伏見櫓の特色

ここでは調査結果や現存する三重櫓や天守との比較によって、伏見櫓の特色について考察する。

### (1) 建築年代

伏見櫓の建築年代は、木幡山伏見城からの移築であった場合は慶長2年、徳川伏見城からの移築であった場合は慶長7年頃と考えられ、その差はわずか5年ほどしかない。現存する三重櫓は伏見櫓を含めて12基<sup>(5)</sup>あるが、そのうち建築年代が最も古いと考えられているのは、慶長6-12年(1601-07)頃に築造された熊本城宇土櫓で、彦根城西の丸三重櫓(慶長11年【1606】頃)、弘前城二の丸辰巳櫓・未申櫓・丑寅櫓(慶長16年【1611】)が続く。伏見櫓は、遅くとも慶長7年頃の建築であり、その場合でも熊本城宇土櫓と肩を並べ現存最古級の三重櫓といえる。また木幡山伏見城からの移築が認められた場合は、現存最古の三重櫓となる<sup>(6)</sup>。

### (2) 平面

伏見櫓の一階平面は、東西8間に南北5間と東西方向に縦長である。現存する三重櫓の一階平面は、熊本

城宇土櫓(9間に8間)、弘前城二の丸辰巳櫓・未申櫓・丑寅櫓(4間四方)、彦根城西の丸三重櫓(5間四方)、名古屋城西北隅櫓(8間に7間)、江戸城本丸富士見櫓(7間に6間)、明石城巽櫓(5間に4間)・坤櫓(6間に5間)、高松城新曲輪月見櫓(5間四方)・旧東の丸良櫓(5間四方)であり、正方形や長方形でもその差が1間(6尺ないし6尺5寸)である。伏見櫓のように一階平面の長短の差が23尺9寸もある事例はなく、特異な事例といえることができる。なお、現存する天守では、彦根城天守(慶長11年)の一階が11間に7間と縦長平面である。また宇喜多直家の沼城天守を移築した伝承がある岡山城大納戸櫓(明治破却)が11間に5間半と縦長であったとされる(石井, 1996)。また二重櫓であるが、松山城野原櫓(慶長年間【1596-1614】)は5間に3間とやや縦長の平面である。以上のような縦長平面の天守や櫓は建築年代に差があるため、このような形式をもって一概に古式とはいえないが、少なくとも現存する三重櫓には事例がなく、伏見櫓の特色のひとつとして挙げられよう。

### (3) 屋根・破風

伏見櫓は、一階と二階を同大として二重目の屋根を東西方向の入母屋造屋根とし、その上の三重目は棟の向きを二重目と互い違い(南北方向)にした入母屋造屋根としている。すなわち四方に入母屋破風を見せている。

前述したように伏見櫓の三階平面は東西(梁間)25尺8寸に南北(桁行)23尺であり、東西(梁間)方向が2尺8寸(約85センチ)ほど長い。日本建築では一般的に長辺を桁行とするため、通常であれば東西方向が桁行となり、三重目の入母屋造屋根の棟は東西方向となるはずである。しかし、伏見櫓では短辺(南北)を桁行とし、長辺(東西)を梁間としている。その寸法差は2尺8寸とわずかであるため構造上の問題はないが、日本建築の通例とは異なっている。このようにあえて短辺を桁行とした理由としては、城戸(1942)で指摘されているように棟の向きを南北方向とし二重目と直行させることで、四方に入母屋破風を見せるためと考えられる。

ところで、このように棟の向きを互い違いにした入母屋造屋根を重ねる形式は、安土城天主や豊臣大坂城天守<sup>(7)</sup>にも見られる。現存する三重櫓では、弘前城二の丸辰巳櫓・未申櫓・丑寅櫓が同形式である。また前述の岡山城大納戸櫓は、一・二階同大で、二重目を入母屋造屋根として、その上の三重目を棟の向きを互い違いにした入母屋造屋根とする形式と考えられており、伏見櫓と同様の形式である。また二重であるが、松山城野原櫓は一重目と二重目の入母屋造屋根を互い違いに重ねた形式である。さらに絵画資料では「安芸

国広島城所絵図」や「備後国之内三原城所」に描かれた広島城・三原城の二重櫓が棟の向きを互い違いにした入母屋造屋根を重ねた形式である。このように縦長の入母屋造の基部に望楼（上階）を載せた櫓は、望楼型天守の起源を示す事例（三浦，1999）であり、伏見櫓もそのような古式を持った櫓といえる。なお、このように入母屋造を互い違いを重ねた形式では、入母屋破風を四方に見せるため、その他の破風を設けた事例はほとんどない。それに対して伏見櫓では二重の南北に千鳥破風を設けており、さらに豪華な外観としている。

なお、三階の南北方向が短いのは、以下に示すように構造上の理由が考えられる。すなわち、三階の南北の側柱は二階の梁上に架けた土居桁に載っている。土居桁が架かる位置は、二階の側柱筋から3分の1間ほど内側に入った箇所であるが、これ以上外側（側柱筋）に近づけてしまうと三階が二重目の端に載ることになり構造上問題がある。したがって三階平面の南北の長さは、現状（23尺）がほぼ最大値であり、これ以上大きくすることは構造上不可能と考えられる。また三階東西の側柱は、二階の梁上に載っている。伏見櫓の一・二階は東西方向に縦長であるため、例えば三階を3間四方にすると望楼部（三階）が基部（一・二階）に比して小さくなりすぎてしまい、二重の屋根に大部分が埋もれることになると考えられる。また構造的には、東西の側柱を受ける桁を新たに架ける必要が生じ、複雑な構造になってしまう。したがって東西の側柱を二階の梁上に載せられ、かつ桁行とする南北との寸法差を最小限とするために可能な限り近づけたのが現在の南北の寸法（23尺）と考えられる。

#### （4）壁面の仕上げ

伏見櫓は一・二階を柱形・長押形造出の真壁造とし、三階を大壁造としている。柱形・長押形を造出した事例は、現存三重櫓では高松城新曲輪月見櫓があり、長押形だけを造出した事例は、名古屋城西北隅櫓・江戸城本丸富士見櫓がある。以上の事例は、すべての階を同様の形式としている。なお、その他の現存三重櫓は下見板張か白漆喰塗の違いはあるもののすべて大壁造である。現存天守では、姫路城天守が最上階を柱形・長押形造出とし、その他の階を大壁造としている。また原爆で倒壊した広島城天守は最上階のみ柱や長押を白木のまま見せる真壁造として、その他の階は下見板張としている。元来はこのように、最上階の格式を高めるために白木や造出の真壁造として下階と区別していたと考えられる。その後、高松城新曲輪月見櫓などのようにすべての階を同等に造るようになり、相対的に最上階の格が低下したと考えられている。寛文5年（1665）頃の宇和島城天守もすべての階を長押形造出

としている。ところが、伏見櫓は一・二階を造出の真壁造とし、本来であれば格を高めるべき最上階（三階）を大壁造としており、ほかの事例と真逆となっている。明治期の古写真によれば、伏見櫓の三階は白漆喰塗の大壁造であり、少なくとも江戸時代後期は現在見られる形式であったと考えられる。現存する天守や三重櫓にこのような形式は見られず、理由や意図は判然としないが、伏見櫓の外観上の特色として挙げられよう。

#### （5）部材に残る痕跡

現地調査の結果、多くの柱・梁などに、ほぞ穴など多数の痕跡が見られた。その多くが相対する位置に同様の痕跡がないため、伏見櫓およびその移築元である松ノ丸東櫓とは無関係と考えられた。したがって、これらの部材は別の建物からの転用材と推測された。ここでは、わずかに見られた伏見櫓あるいは松ノ丸東櫓に関係すると考えられる痕跡について記す。

一階北側やや東寄りの柱（へ・と1）には、腰の高さの位置に敷居・鴨居の痕跡があった。したがってこの位置に一間幅の窓があったと推測される。伏見櫓の北側は、城内側に相当する。丸亀城天守などのように、城内側に窓を設けない、もしくは数を減じる事例があることから、移築に際して窓を撤去し壁とした可能性が考えられる。次に二階北側東寄りの柱（た1・れ1）には、腰の高さの位置に敷居・鴨居の痕跡があった。この位置に半間幅の窓が柱（た1・れ1）に寄せて計4つあったと推測される。一階と同様に北側が城内であるため中央の窓だけで十分と考えられ、移築時に撤去され壁とした可能性が考えられる<sup>(8)</sup>。一階北側西端の「い・ろ1」に敷居・鴨居の痕跡があった。敷居・鴨居それぞれの痕跡の高さからして、渡櫓などと繋ぐ出入口があった可能性がある。伏見櫓、松ノ丸東櫓のいずれの時代のものかは判然としないが、この部分には渡櫓が接続していた可能性があり、その出入口とも考えられる。

二階の柱（る～た4、た2・3）に壁痕が見られた。昭和修理前の写真によれば、「わ4・か4」間と「た3・4」間を除いて土壁があったことがわかる。この土壁がいつの時代のものか定かではないが、骨董屋・ピリヤード場として使用されたことがあり、それに関連して補加された可能性が考えられる<sup>(9)</sup>。また一階の入側柱（に3、4・ほ4・へ4・と2、3、4）に段や仕切りと考えられる痕跡、ろ4・は4に壁痕があった。いずれもいつの時代かは定かでない。

三階の筋交に高さ1寸、柱に高さ2寸5分の溝状痕跡があった。筋違の痕跡の下端と柱の痕跡の上端は高さが一致しており、同一の痕跡と考えられた。牛梁直下の高さにあることから梁や小屋組を隠す天井という

可能性がある。

## 5. おわりに

本稿では、現地調査の成果などをもとに、福山城伏見櫓の建築年代やその特色について考察した。その結果、伏見櫓には転用材が多数使われていること、それによって生じた不都合を繕うために現場合わせが見られること、架構や平面の構成に古式な点が見られることなど、これまであまり知られていなかった特色を明らかにできた。また、その建築年代を明確にはできなかったが、上記のような特色から、秀吉が築いた木幡山伏見城の松ノ丸東櫓からの移築の可能性を指摘した。このことについては、今後の解体修理などによって新資料の発見に期待したい。

## 付記

現地調査に際して、福山城博物館・福山市文化振興課の皆様には便宜を図っていただきました。また実測図の作成には、佐藤圭一氏（福山大学工学部 教授）・大岩智之氏（福山大学工学部 大学院生）・河田陽依菜氏（同）・道上拓海氏（福山大学工学部 学部生）・川手優花氏（同）・橋高弘憲氏（同）・佐藤愛絵氏（広島大学大学院文学研究科 修了生）のご助力を得ました。記して感謝いたします。

なお、本稿は福山市（2020）を加筆・修正したものです。

## 註

- (1) 伏見城からの移築については、『備陽六郡志』のほかに『水野系譜』にも「当此時賜伏見城之三重櫓、櫛形櫓、月見櫓、大手門、鉄門及多門一棟、屏百八十間」という記述がある。「三重櫓」が伏見櫓を指すと考えられている。
- (2) 昭和修理時に発見された二階梁の「松ノ丸ノ東やくら」という刻銘のように、建築年代や経緯に関わる銘の確認を目視で行った。三重目の棟木に昭和修理上棟の墨書銘、二・三重目の小屋組の貫に昭和修理時（一部それ以前【江戸時代】の修理時）の番付が見られた。さらに複数の柱に墨書銘・刻銘があったが、いずれも江戸時代末や明治・大正時代の人物による記名（記念碑的なもの）であった。
- (3) 今回の痕跡調査は部材の表面を観察したもので、痕跡が見えなかったものも一定数存在すると考えられる。そのため、当初材と判断したが、実際は転用材である可能性もある。
- (4) 同時に修理工事が行われた筋鉄御門は解体修理であったためか、部材のほとんどが取替材となっている。

- (5) 現存する三重櫓は、伏見櫓のほかに弘前城二の丸辰巳櫓・未申櫓・丑寅櫓、江戸城本丸富士見櫓、名古屋城西北隅櫓、彦根城西の丸三重櫓、明石城巽櫓・坤櫓、高松城新曲輪月見櫓・旧東の丸良櫓、熊本城宇土櫓がある。
- (6) 秀吉が関係した城郭建築は、大坂城の極楽橋を移築したと考えられる宝厳寺唐門しかない。詳しくは、拙稿（2007）を参照されたい。
- (7) 拙稿（2011；2014）を参照されたい。
- (8) なお、一・二階とも北側東寄りにだけ窓があり、その対称となる位置（西寄り）にないということから、松ノ丸東櫓の北側（現在の）西寄りには渡櫓などが接続していたとも考えられる。
- (9) 伏見櫓は明治15年（1882）頃に、個人に貸出をされ、備後倶楽部と称する骨董屋・ビリヤード場となり、その後数人の手を経て大正8年（1919）頃に廃止されたという（濱本，1936）。

## 参考文献

- 石井正明（1996）：沼城天守を移した大納戸櫓. 『歴史群像名城シリーズ12 岡山城』学習研究社, 76-77.
- 鐘尾光世（2010）：福山城公園盛衰記（その1）：福山城天守閣・伏見櫓・筋鉄門の修繕見積書（明治二十八年）について. 『アーカイブスふくやま』, 2, 46-53.
- 城戸久（1942）：備後福山城伏見櫓建築考. 『建築学会論文集』, 24, 1-6.
- 佐藤大規（2007）：宝厳寺唐門. 『日本建築学会学術講演梗概集』, 21-22.
- 佐藤大規（2011）：豊臣大坂城天守の復元的研究. 『史学研究』, 270, 34-55.
- 佐藤大規（2014）：安土城天主の構造および外観に関する復元考察. 『史学研究』, 283, 22-52.
- 滋賀県教育委員会事務局社会教育課（1962）：『重要文化財彦根城西の丸三重櫓及び続櫓二の丸佐和口多間櫓修理工事報告書』滋賀県教育委員会事務局社会教育課.
- 重要文化財高松城修理工事事務所（1957）：『重要文化財高松城二之丸月見櫓・続櫓・渡櫓・水手御門修理工事報告書』高松市.
- 高松市（1967）：『重要文化財 高松城旧東之丸良櫓移築修理工事報告書』高松市.
- 名古屋市（1964）：『重要文化財名古屋城西北隅櫓修理工事報告書』名古屋市.
- 濱本鶴賓編（1936）：『福山城誌』福山市役所.
- 弘前城修理事務所（1941）：『國寶弘前城二ノ丸辰巳櫓、同丑寅櫓及三ノ丸追手門維持修理報告書』弘前城修理事務所.
- 福山市（2020）：『重要文化財福山城伏見櫓・筋鉄御門調

福山城伏見櫓に関する考察

- 査報告書』福山市.  
福山市教育委員会（2018）：『史跡福山城跡保存活用計画』  
福山市教育委員会.  
古川重春（1936）：『日本城郭考』巧人社書店.  
文化財建造物保存技術協会（1982）：『重要文化財 明石城  
「巽櫓」「坤櫓」修理工事報告書』兵庫県.  
文化財保存計画協会（1990）：『重要文化財 熊本城宇土櫓  
保存修理工事報告書』熊本市.  
三浦正幸（1999）：『城の鑑賞基礎知識』至文堂.

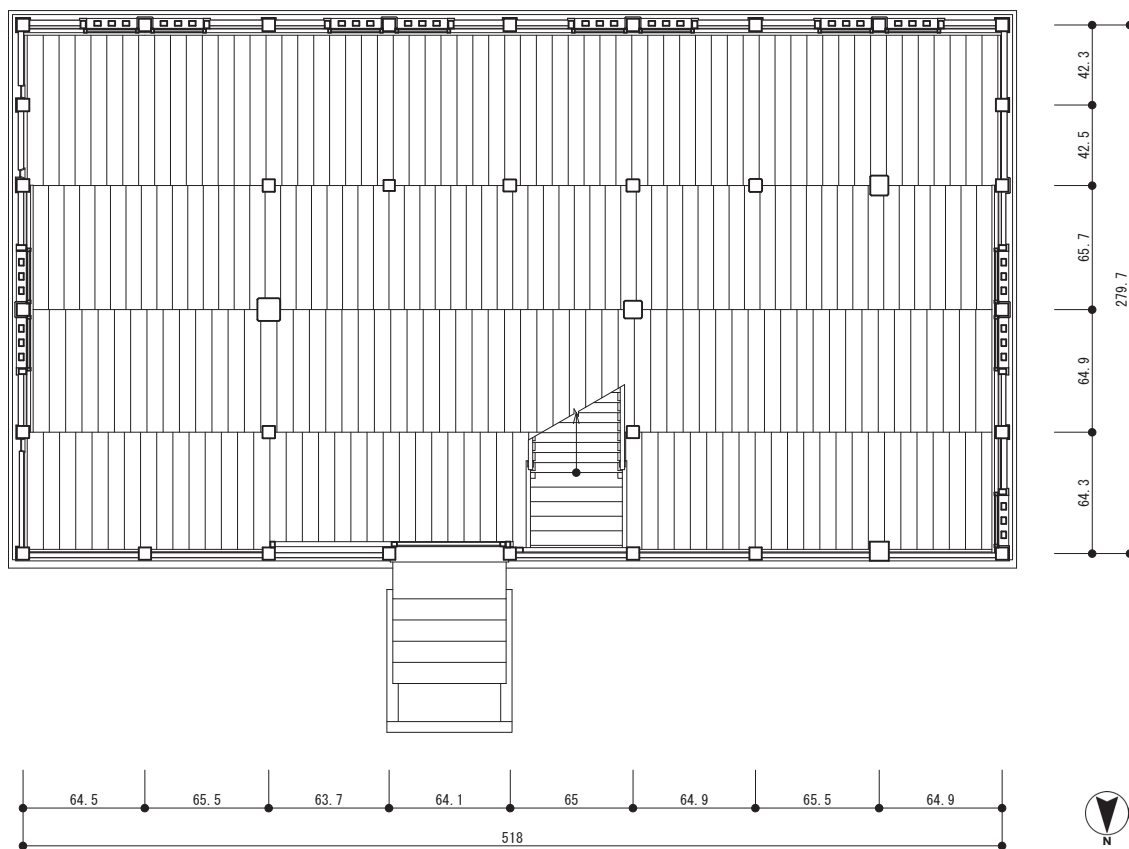


図1 伏見櫓一階平面図（1/120） 単位：寸

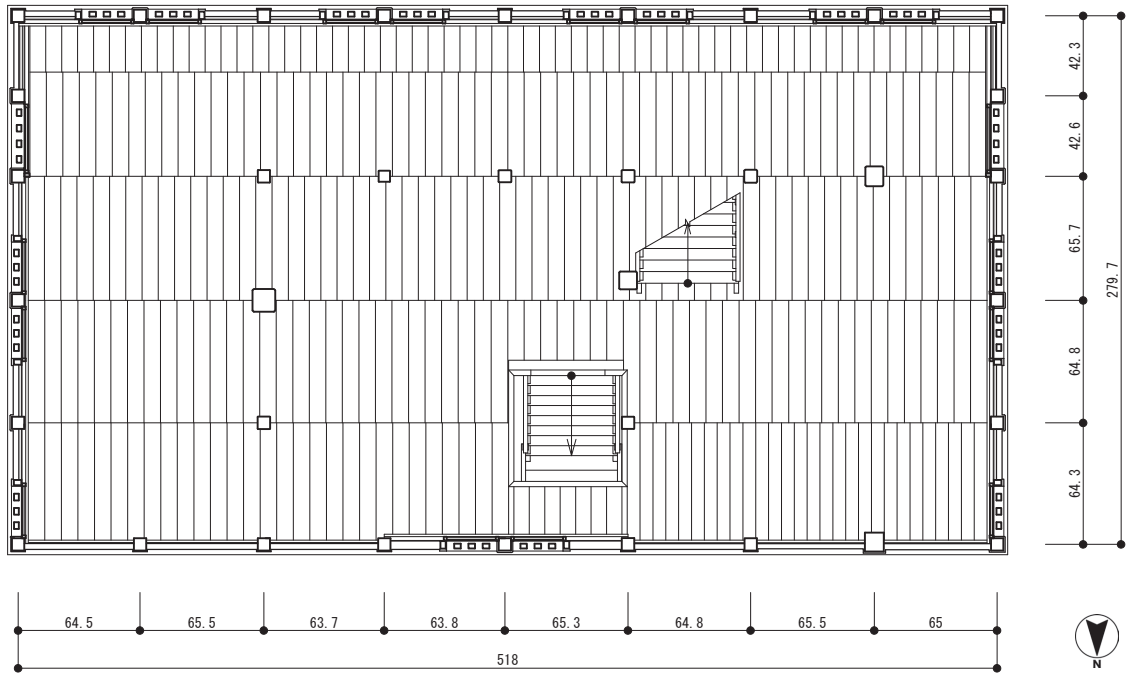


図2 伏見槽二階平面図 (1/120) 単位：寸

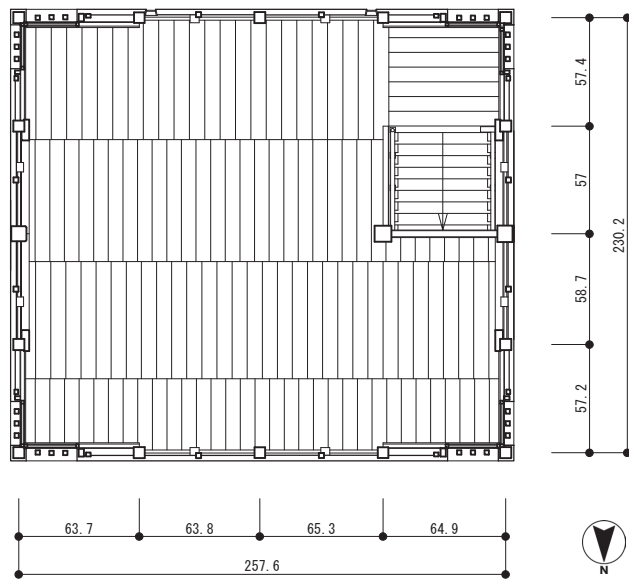
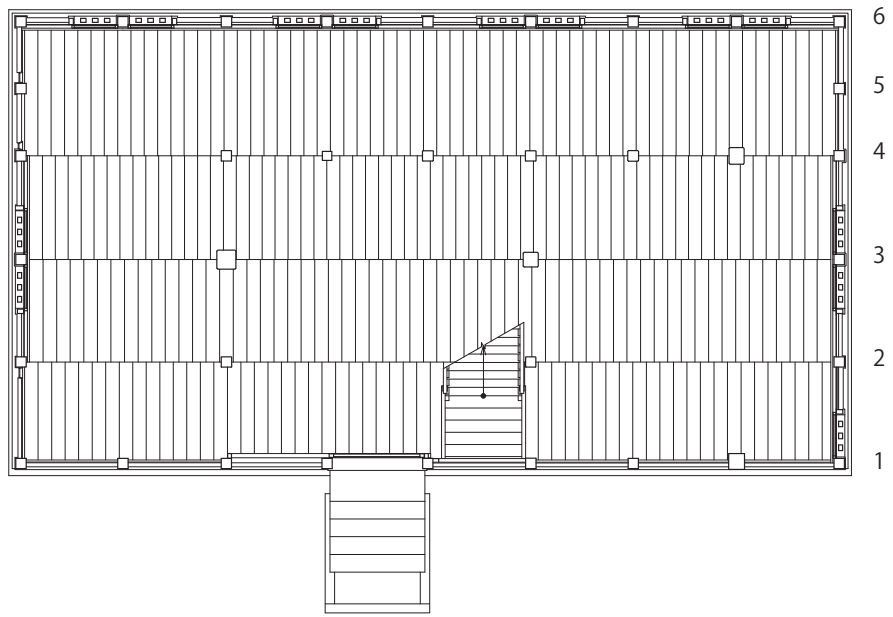


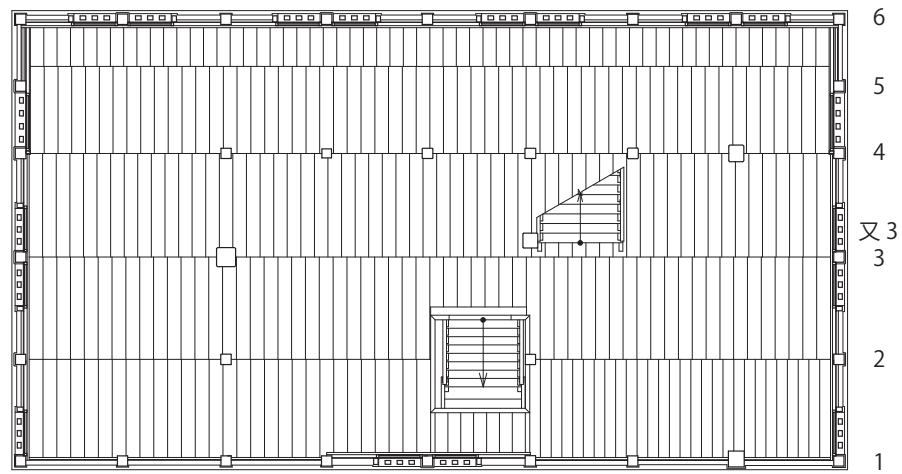
図3 伏見槽三階平面図 (1/120) 単位：寸



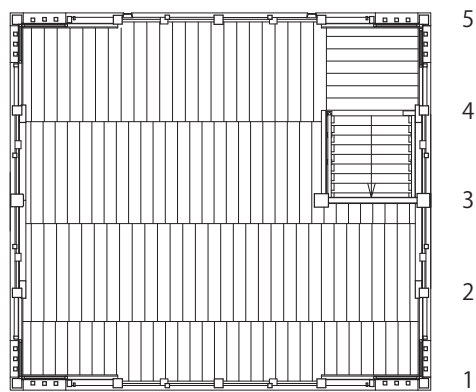
福山城伏見櫓に関する考察



い ろ は に ほ へ と ち り  
一階



ぬ る を わ か よ た れ そ  
二階



つ ね な ら む  
三階

図4 伏見櫓柱番付図

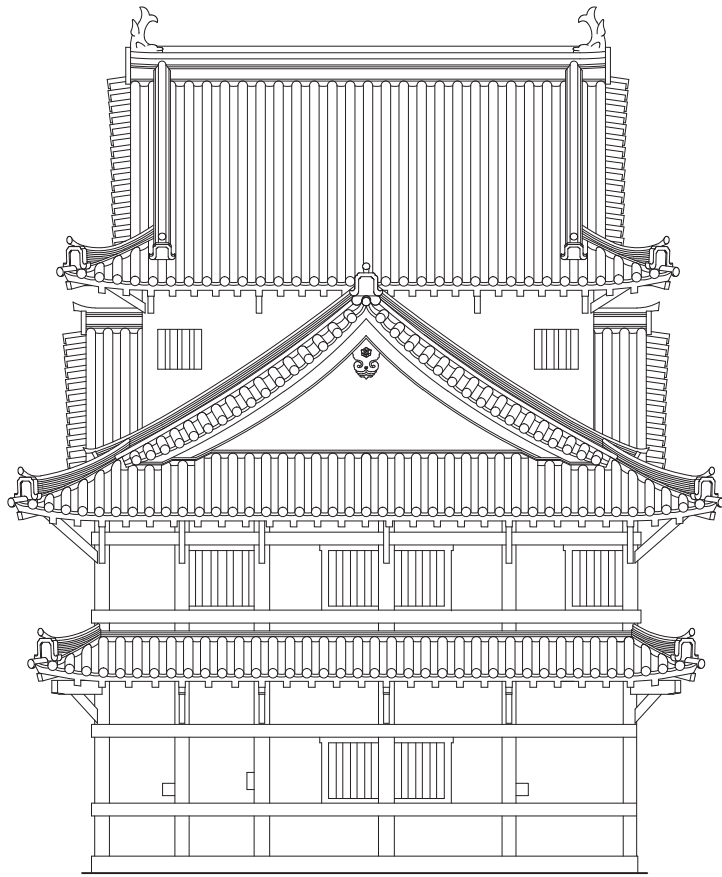


図5 伏見櫓東立面図 (1/120)

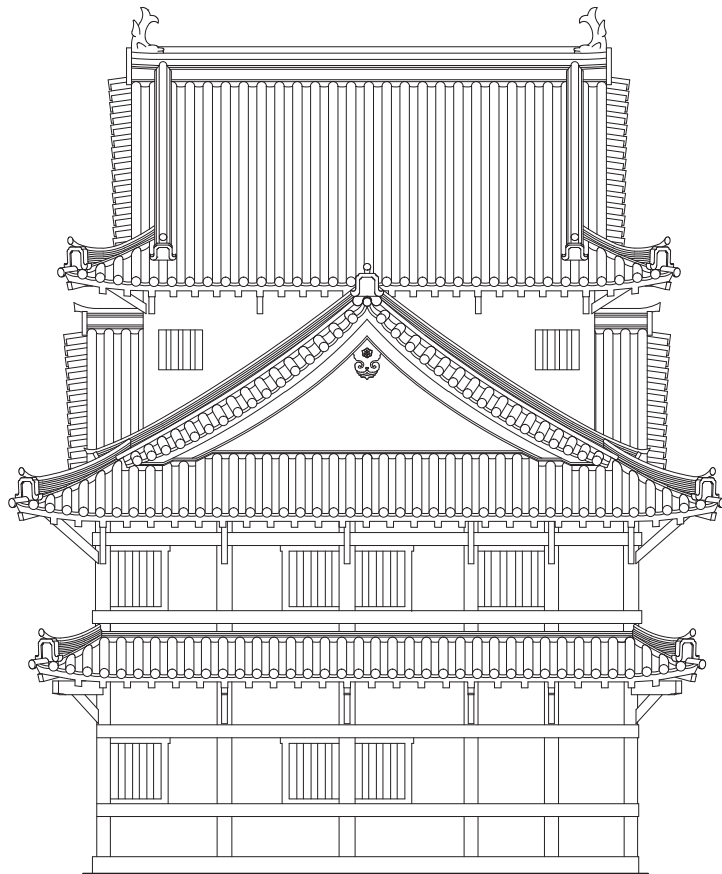


図6 伏見櫓西立面図 (1/120)

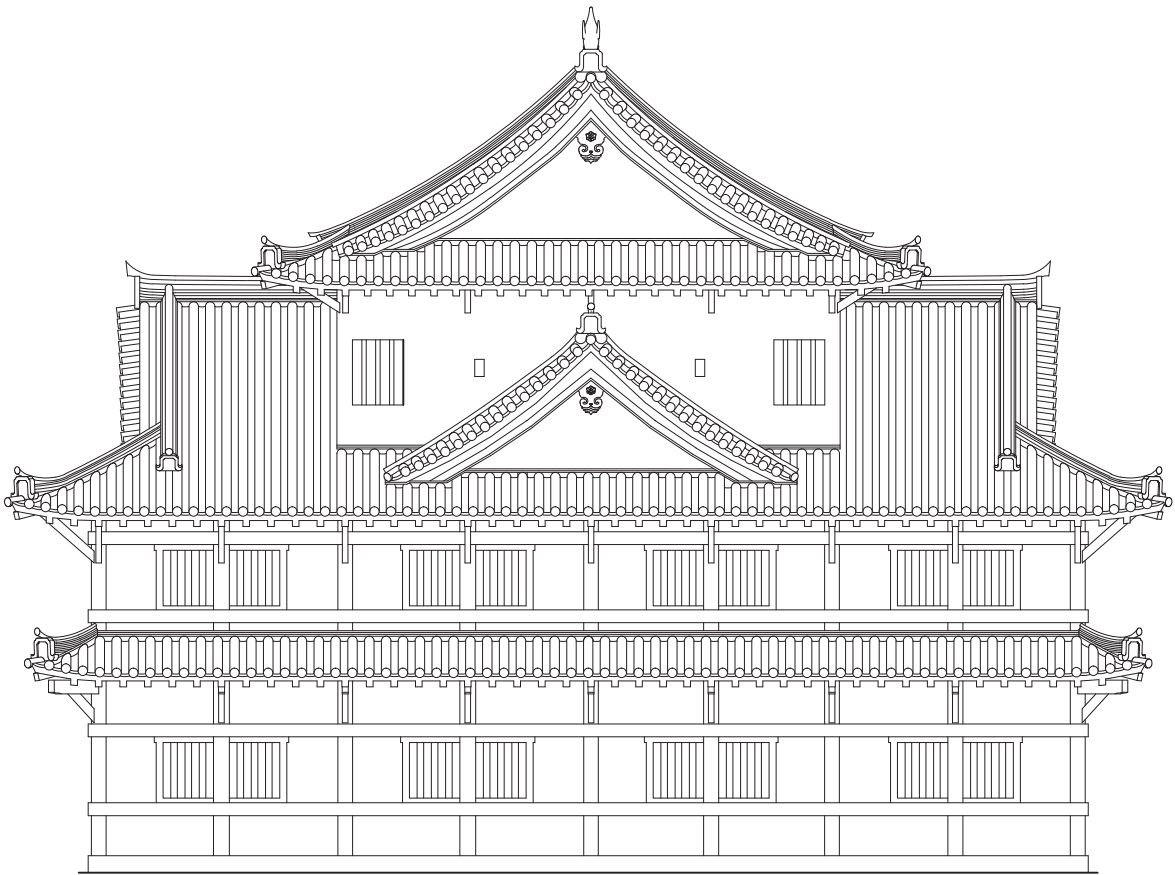


図7 伏見櫓南立面図 (1/120)

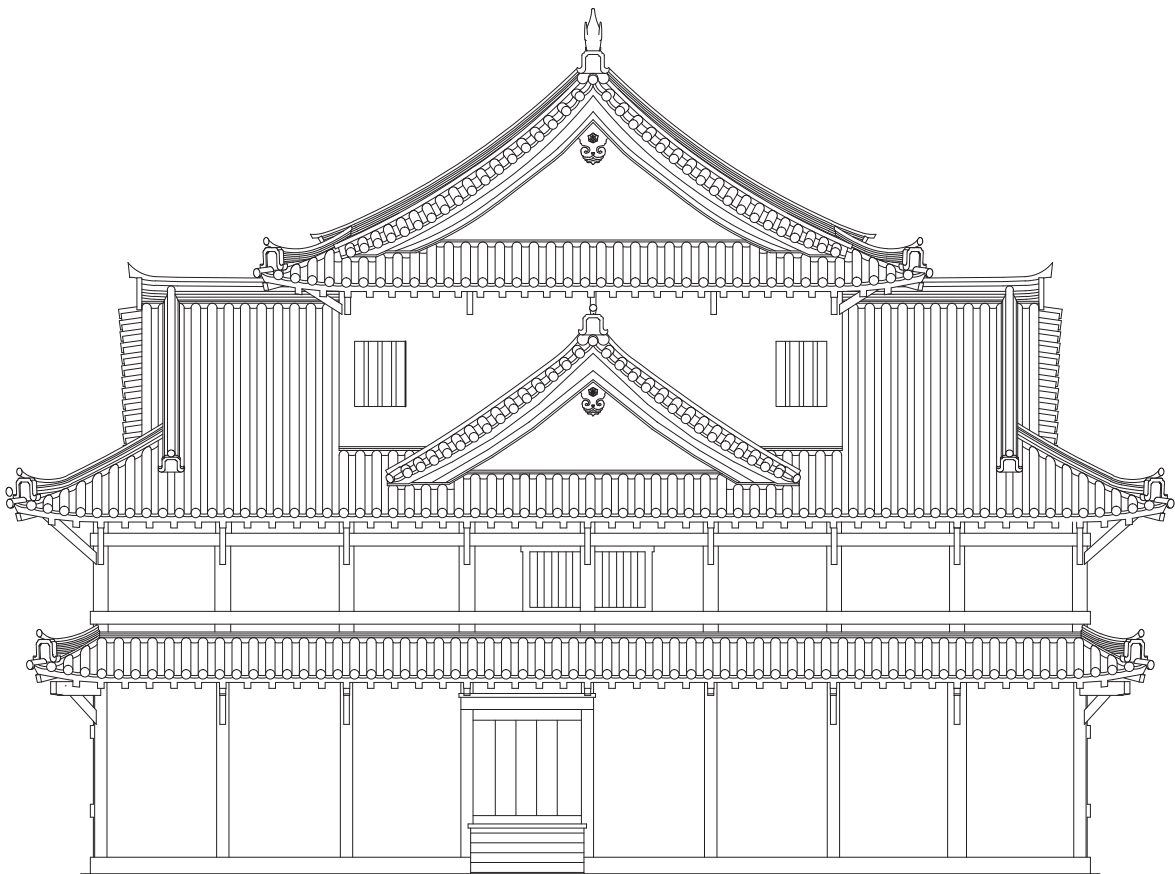


図8 伏見櫓北立面図 (1/120)

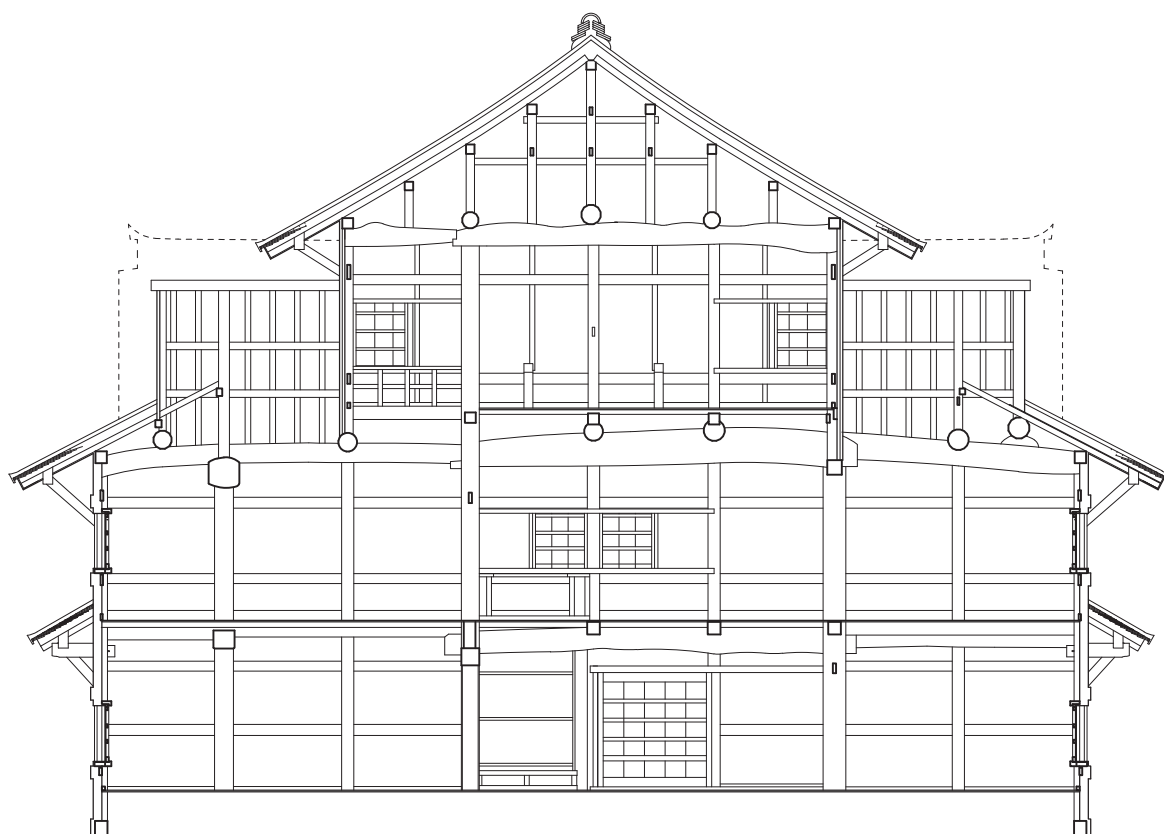


図9 伏見櫓梁間断面図 (1/120)

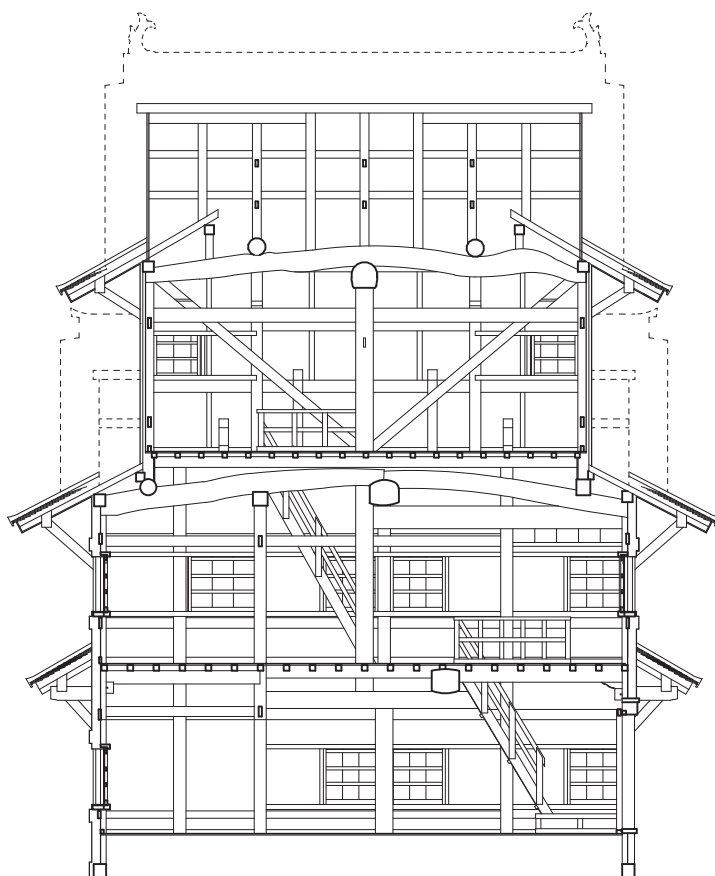


図10 伏見櫓桁行断面図 (1/120)